

## 【研究報告】

# 遺族の心の整理を促すための訪問看護師による 効果的な遺族訪問方法の検討

— 実施時期に焦点をあてて —

平 賀 睦\*

## 【要 旨】

遺族の心の整理を促すために訪問看護師が遺族訪問をいつどのように実施するとよいか、その具体的方法を検討するために、遺族訪問を受けた時期ごとの遺族の状況と意思を明らかにした。遺族訪問を受けたことのある遺族を対象に半構成的面接を行い、14名から得られたデータを質的帰納的に分析した。

結果、遺族が遺族訪問を受けた死別後1か月以内の早い時期の状況として【忙しさ】【健康状態の悪化】があり、四十九日頃では【ひと段落】【変化の兆し】があった。また、1か月以内の遺族訪問では【訪問看護師への信頼と感謝】【気がかりが解消された安堵感】を、四十九日頃では【癒やし】を感じていた。

死別後の時期により遺族の状況は異なり、状況の違いに応じて遺族訪問に対する思いも異なることから、遺族の心の整理を促すためには、個々の状況に応じて訪問する時期を選択し、その時期に配慮した関わりを行うことが効果的であると考えられた。

【キーワード】 訪問看護、遺族ケア、グリーフケア

## 1. はじめに

親しい人々に見守られながら自分らしく療養できる自宅において、最期の時を迎えることを望む人は多い（内閣府，2015）。我が国では、団塊の世代が75歳以上となる2025年を見据え、要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることができるよう、地域包括ケアシステムの実現が目指されており、人生の最終段階を在宅で過ごすという選択もしやすいように制度や環境が整えられつつある。これらのことから、今後在宅での終末期ケアの期待がさらに高まることが予想される。

こうした在宅での終末期ケアを担う専門職として、訪問看護師は重要な役割を果たしている。訪問看護においては利用者と家族をひとつの単位として看護を提供することから、多くの訪問看護事業所が、利用者が亡くなった後も一般的に悲哀という一連の心理過程を辿る遺族へのケアを、積極的に、あるいは必要に応じて実施している現状がある（工藤，古瀬，2016）。

遺族へのケアとして我が国で最も実施率が高い「遺族訪問」に焦点を当てて訪問看護師の実践とそ

の意味を明らかにした研究がある。それによると、遺族訪問における訪問看護師の役割として、遺族の死の受容と介護生活の肯定的な意味づけを促進し、死別後の生活をうまく送ることが出来るようにすることと、その過程で訪問看護師自身の精神的健康を保ち、今後継続していく在宅での終末期ケア対象者の生き方を尊重し支援する技術を磨く、という2つの役割が見出されている（平賀，2008）。遺族を対象とした研究においても、信頼関係が構築された訪問看護師による遺族訪問は、【介護生活への区切り】をつけるとともに【訪問看護師との人としてのつながりを再確認】し、【心の安定化】を得て【これからの生活に前向きに臨む気持ちを獲得】する機会となっており、訪問看護師を対象とした研究と同様に、遺族の心の整理を促し、これからの生活への橋渡しをすることが、訪問看護師の役割であることが示唆されている（平賀，2012）。しかし、こうした訪問看護師の役割を効果的に果たすために、遺族訪問をどのように実施すべきか具体的な方法を明らかにした文献はない。

我が国の訪問看護における遺族へのケア実施率は

\* 1 日本赤十字広島看護大学 基礎看護学

少しずつ高まってきてはいるが、ほとんど実施していない事業所も2割程度みられる(島内ら, 2006; 工藤, 古瀬, 2016)。そのような中で、心の整理を必要とする遺族に対して効果的に役割を果たしながら遺族訪問を実施していくための具体的方法を検討する必要があると考えた。今回は、遺族訪問の具体的方法を検討するうえで、遺族訪問を実施する時期に焦点をあてることとした。

## II. 研究目的

1. 訪問看護師から遺族訪問を受けた時の遺族の状況と、その時に受けた遺族訪問に対する遺族の思いを、遺族訪問が実施された時期ごとに明らかにする。
2. 1より、遺族の心の整理を効果的に促す訪問看護師による遺族訪問の具体的方法を検討する。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

記述的探索的デザイン

### 2. 研究対象者

A県内の4ヶ所の訪問看護事業所より、訪問看護を利用しながら在宅で直接的に家族の介護を行い看取った者のうち、訪問看護師から遺族訪問を受けたことがあり、その時の経験を語る事が可能と考えられる遺族15名を選定してもらい、研究対象者とした。また、基本的には死別後2年から5年経過した遺族を対象とした。これは悲嘆から回復し精神的に落ち着きを取り戻す時期で、かつ記憶の保持を配慮したためである。ただし、2年以内でも担当訪問看護師により死別を受け入れ経験を語る事が可能と判断され、本人からも了承が得られた遺族は対象とした。

### 3. データ収集方法

平成22年1月から8月にかけて、対象者の希望する場所にて、1時間から2時間程度の半構成的面接を1回ずつ行った。インタビューガイドに基づき、主に介護中の状況、遺族訪問を受けた時の状況、遺族訪問を受けた時にどのような思いをもったかについて質問し、自由な語りを促した。了承が得られた場合は内容の録音を行い、録音内容を逐語録に起こしたものをデータとした。

### 4. 分析方法

まず、それぞれの事例から遺族訪問が実施された時期を確認し、事例を訪問時期ごとに分類した。その後、分類された訪問時期ごとに、以下のように分析を実施した。

逐語録を読み、得られたデータを意味のある単位

に区切り、その部分を端的に表現する名前をつけてコード化した。訪問看護師による遺族訪問時の状況やその時の思い、またこれらに関連する事象に着目してコードを類似するものでまとめてカテゴリー化し、抽象度をあげた。

分析をデータ収集と並行することで、新たなコードをすでにあるカテゴリーと類似性と相違性の視点で継続比較させ、カテゴリーの追加や充実を図った。

最終的にコード化された概念間をつなぐ接続語などにも着目し、カテゴリーの関係性を検討した。

## 5. 倫理的配慮

研究対象者には研究内容、プライバシーの保護、参加は自由意思によるもので途中での辞退も可能であることを口頭と文書で説明し、同意する場合には同意書を交わした。また、死別という繊細な内容に触れるため、対象者の選定においては、訪問看護事業所の管理者と心理面について検討した。また、研究中也適宜関わり方を相談した。

研究実施にあたっては、日本赤十字広島看護大学の研究倫理審査委員会にて審査を受け、承認を得た(審査番号:0901)。

## IV. 結 果

### 1. 対象者の概要(表1)

遺族訪問の時期について思い出すことができなかった1名の遺族を除き、14名の遺族を分析の対象とした。14名の遺族は、死別後9か月から4年2か月(平均2年3か月)が経過しており、性別は男性2名、女性12名で、療養者を介護し看取った時の年齢は、40歳代から80歳代だった。対象者から語られた事例は12名で、亡くなった療養者との続柄は、妻7名、嫁3名、娘2名、夫1名、息子1名であった。訪問看護利用期間は1か月から7年で、看取りの場所は自宅が6例、病院が8例だった。訪問看護師から遺族訪問を受けた時期は死別後4日から6か月後であり、多くは1か月以内と四十九日後に受けていた。

以下に死別後1か月以内と四十九日頃、および四十九日以降のそれぞれの時期における遺族訪問における遺族の状況と思いを述べる。記述中、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは< >、遺族から語られた具体的な語りの例は「 」で表記する。

### 2. 死別後1か月以内の遺族訪問(表2)

#### 1) 遺族の状況

死別後1か月以内の比較的早い時期での遺族の状況として、【忙しさ】と【健康状態の悪化】があった。【忙しさ】は、すべての対象者から語られ、その程

表1 研究対象者の概要

対象者	性別	年齢	続柄	看取り場所	死別後の家族構成	訪問看護利用期間	遺族訪問実施時期	看取り後の期間
A	女	50代	嫁	病院	子・孫と同居	2年7ヶ月	四十九日前	1年1ヶ月
B	女	60代	妻	病院	1人暮らし	約4年	6ヶ月後	1年
C	女	70代	妻	病院	子・孫と同居	5年4ヶ月	初七日後	2年
D	女	80代	妻	自宅	1人暮らし	2ヶ月	18日後	2年4ヶ月
E	女	70代	娘	自宅	孫と同居	6年5ヶ月	1週間後	2年11ヶ月
F	男	80代	夫	病院	1人暮らし	3年8ヶ月	23日後	3年4ヶ月
G	女	70代	妻	病院	1人暮らし	4年2ヶ月	四十九日前	4年2ヶ月
H	女	70代	妻	病院	子・孫と同居	5年5ヶ月	四十九日後	2年2ヶ月
I	女	40代	娘	病院	親・子と同居	5年5ヶ月	四十九日後	2年2ヶ月
J	男	60代	息子	自宅	夫婦のみ	約7年	4日後・2週間後	2年5ヶ月
K	女	60代	嫁	自宅	夫婦のみ	約7年	4日後・2週間後	2年5ヶ月
L	女	70代	妻	病院	1人暮らし	約5ヶ月	四十九日前	9ヶ月
M	女	70代	妻	自宅	妹と同居	約1ヶ月	16日後・四十九日前	1年6ヶ月
N	女	70代	嫁	自宅	夫婦のみ	6年2ヶ月	17日後	2年9ヶ月

表2 死別後1ヶ月以内の遺族訪問時の状況と思い

	カテゴリー	サブカテゴリー
状況	忙しさ	弔問客へのゆとりある対応が難しい忙しさ 悲しむ間もない忙しさ 記憶が曖昧になるほどの忙しさ 追善法要に伴う忙しさ 弔問客の対応に伴う忙しさ 自分や身内の体調不良に対応することに伴う忙しさ 死亡後の諸手続きに伴う忙しさ
	健康状態の悪化	死別後の急激な体調不良 治療中の疾患の増悪
思い	気がかりが解消された安堵感	不要物品の返却・寄贈による安堵感 お世話になった気持ちを伝えたことによる安堵感
	訪問看護師への信頼と感謝	礼儀を重んじた態度への信頼感の高まり 配慮ある訪問への感謝と喜び

度は<弔問客へのゆとりある対応が難しい忙しさ><悲しむ間もない忙しさ><記憶が曖昧になるほどの忙しさ>と表現されていた。忙しさの内容としては、<追善法要に伴う忙しさ><弔問客の対応に伴う忙しさ><自分や身内の体調不良に対応することに伴う忙しさ><死亡後の諸手続きに伴う忙しさ>があった。【忙しさ】の程度は、亡くなった療養者の社会的なつながりの程度や自分や身内の体調の程度によって差がみられた。例えば社会的なつながりについては、会社の重役などを務めており交友関係が多岐にわたっていた場合には、葬儀とは別にお別れの会を開催したり、葬儀に来ることができなかった多くの弔問客の対応にその後追われるなど、忙しさの程度が高くなっていた。一方で、社会的なつながりが親族や地域の範囲内であった場合には、関係者の多くが葬儀や追善法要へ参列されるこ

とから、葬儀後の弔問客は少ないなど、状況によって忙しさの程度には個人差がみられた。

【健康状態の悪化】は、看取り後に急に体に痛みや倦怠感が生じて動けなくなるなど<死別後の急激な体調不良>と、介護中から治療を継続していた疾患が急に悪化する<治療中の疾患の増悪>から生成された。これらは全員が体験したものではなかったが、<死別後の急激な体調不良>は、後期高齢者であることや、ほぼ一人で介護を担っていた場合に、また<治療中の疾患の増悪>は、もともと疾患を患っており介護中から治療を行っていた場合に、それぞれ生じていた。

## 2) 遺族訪問についての思い

死別後1か月以内の【忙しさ】や【健康状態の悪化】という状況がある中で遺族訪問を受けた遺族の遺族訪問に対する思いとして、【気がかりが解消された

安堵感】と【訪問看護師への信頼と感謝】があった。

【気がかりが解消された安堵感】は、しなければならぬこととして気にかかっていたことが達成され、ほっとした気持ちを表した状態である。これには、＜不要物品の返却・寄贈による安堵感＞と＜お世話になった気持ちを伝えたことによる安堵感＞があった。＜不要物品の返却・寄贈による安堵感＞は、遺族は大変な忙しさの中で、看取り後に必要のなくなった多量の医療品や介護用品の処理に頭を悩ませていたが、下のC氏の語りの例にもあるように、こうした物品を遺族訪問で訪問看護師に返却したり寄贈したりして引き取ってもらうことで気がかりが解消し、安堵感につながっていた。また、＜お世話になった気持ちを伝えたことによる安堵感＞は、介護中によくしてくれた訪問看護師に対して面と向かって感謝の気持ちを伝えたいという気がかりをもっていたが、遺族訪問でそれを伝えられたことで安心していた。

「まあ、早めに、うちはどうだったかな？でもやっぱりね、その置いてあるじゃないですか、いろいろ借りたりしたもの。で、取りに来られると、あれもお返ししたからというすっきりした気持ちはありますよね、そこが片付いたというかな、はい。」(C氏)

【訪問看護師への信頼と感謝】は、亡くなった療養者の死を知り、一刻も早くお参りに駆けつけてくれるなど、訪問看護師の看護師としてだけでなく人としての姿勢にも信頼感を感じる＜礼儀を重んじた態度への信頼感の高まり＞と、家族である自分に対してわざわざ訪問してねぎらいの言葉をかけてくれた訪問看護師の気遣いを感じ、そのことに対して感謝や喜びを感じる＜配慮ある訪問への感謝と喜び＞から構成された。以下は＜配慮ある訪問への感謝と喜び＞の語りの例である。

「なんかね、あの不思議なもんで、やはり来てもらって、向こうにこうこうこういうふうなあれで亡くなりましたと言うと、極端な話ほかの仕事もあるが、終わられてすぐに飛んできていただくと、いうふうな早いほど、私の方としてはありがたいというか、ああ思っただけ来てくれたんだと思いましたね、忙しいのにね。」(J氏)

### 3. 四十九日頃の遺族訪問 (表3)

#### 1) 遺族の状況

四十九日頃の遺族の状況として、【ひと段落】と【変

表3 四十九日頃の遺族訪問時の状況と思い

	カテゴリー	サブカテゴリー
状況	ひと段落	状況のひと段落 気持ちのゆるみ
	変化の兆し	体調不良の出現 悲嘆の深まり 悪化していた健康状態の回復 生活習慣の変化 家族内役割の変化
思い	癒やし	落ち着いて行える会話による癒やし 感情の表出による癒やし 人と接することによる癒やし

化の兆し】があった。

【ひと段落】は、追善法要がほぼ終わり、納骨あるいはその準備を済ませたことや、弔問客も減り、死別後に行うべき各種手続きもほぼ終わるなどの＜状況のひと段落＞と、すべきことに日々追われていた緊張感が解けたり、故人を無事にあの世に送ることができたという安堵を感じるなどの＜気持ちのゆるみ＞から構成された。

また、この気持ちのゆるみから＜体調不良の出現＞や悲しみやさみしさなどにより意識が向く＜悲嘆の深まり＞がみられた。一方で、死別後早期に健康状態が悪化した遺族は、この頃になると＜悪化していた健康状態の回復＞を経験していた。さらに、介護が中心となっていたこれまでの生活が変わる＜生活習慣の変化＞が生じるとともに、新たに＜家族内役割の変化＞が起こるなど、死別から少し時間が経過した四十九日頃の遺族には、プラスにもマイナスにも環境や気持ちに【変化の兆し】が表れ始めていた。

#### 2) 遺族訪問についての思い

四十九日頃に遺族訪問を受けた遺族の思いとして、【癒やし】があった。これは、訪問看護師との＜落ち着いて行える会話による癒やし＞と、＜感情の表出による癒やし＞＜人と接することによる癒やし＞から構成された。＜落ち着いて行える会話による癒やし＞では状況が一段落したことで時間的なゆとりができることで、よく知る訪問看護師に療養者にまつわる思い出や変化しつつある状況を語ることで気持ちの和みを感じていた。また、＜感情の表出による癒やし＞は、過去を振り返り、悲しみや喜びなどの感情を表出し、訪問看護師と共有することで精神的安定を得ていた。以下にその語りの例を示す。

「話をしよって、いろいろああじゃったよね、

こうじゃったよねって、あの人が一番よう知っ  
とってじゃけえね。身近で看とってんじゃけえ。  
ほいで、私がちょっと思い出して涙がでて、お父  
さんに関するいろいろ、そんな時のことがいろいろ  
と出てくるわけよ。…(中略)…まあ、時期にし  
たらよかったよね。人の出入りがちょっと落ち着  
いたごろがねえ。」(M氏)

#### 4. 四十九日以降の遺族訪問

1名の遺族において、死別後6か月過ぎた頃に遺  
族訪問を受けていた。この遺族には、死別後しばら  
く健康状態の悪化による継続的治療を要する  
【落ち着かない健康状態】があった。介護中から病  
気を思い、治療を行いながら介護をしており、死別  
直前に病状が悪化し、その後に入退院を繰り返して  
いた。

この場合、訪問看護師に現状を理解してもらいた  
いが過度の心配をかけたくないという【現状を伝え  
ることへの葛藤】をもち、訪問看護師との再会を望  
みつつも病状が安定してから落ち着いて会うことを  
望んでいた。

## V. 考 察

遺族は、死別後1か月の間、非常に多忙であるこ  
とが明らかとなった。そして、その忙しい時期に、  
介護に使用していたが今や必要なくなった多量の  
物品をどのように整理すればよいかということに頭  
を悩ませたり、お世話になった訪問看護師に感謝の  
気持ちを伝えたいといった気付きを持っていた。  
この時期に訪問看護師から遺族訪問を受けること  
で、そうした気付きを解消し安堵感を得る機会と  
なっていた。介護中に使用していた物品の整理に悩  
んだり、訪問看護師に感謝の気持ちを伝えたいとい  
う思いは、介護の延長線上にあるものであり、こ  
うした気付きが解消することは、介護生活に一区切  
りをつけることにもつながる(平賀, 2012)。この  
ことから、介護中に使用していた物品が多量に残っ  
ているような場合や、療養者の最期を病院で看取り、  
訪問看護師との挨拶が取り交わしていない場合など  
は、死別後の早い時期に遺族訪問をすることによ  
って、遺族の精神的負担を軽減したり、介護生活に一  
区切りをつけて気持ちを切り替えるきっかけを提供  
しうることが示唆された。

また、この時期に遺族訪問を受けることで、遺族  
は【訪問看護師への信頼と感謝】を感じていた。配  
偶者と死別した人の2割は死別後に健康満足度が下  
がり、特に死別直後から2年の間は悪化する傾向が

あることが示されている(東京都老人総合研究所、  
東京大学、ミシガン大学, 2008)。さらに、独居高  
齢者を対象として行われた調査において、今後利用  
してみたいサービスとして「緊急時につけてく  
れるサービス」や「話し相手、困ったときの相談相  
手」が上位にあがっており(みずほ情報総研株式会  
社, 2012)、一人暮らしとなった高齢者には健康上  
の不安があり、困りごとが起きた際に頼れる場所を  
求めている状況がうかがわれる。今回の調査でも、  
死別後に一人暮らしとなった事例は多く、死別後  
1ヶ月以内の早い時期の遺族の状況として【健康状  
態の悪化】が生じていることが明らかとなった。こ  
うしたことから、訪問看護師が死別後1か月以内の  
早い時期に遺族訪問を行うことは、遺族の健康状態  
の確認を行う機会になると同時に、遺族にとっては、  
訪問看護師を信頼できる存在として意識する機会と  
なりうると考えられる。特に死別後に一人暮らしと  
なれた高齢者や、自身の健康状態に不安を持つ遺  
族にとって身近な医療者に何かあれば相談できると  
いう精神的安定の基盤を得ることになると考えられ  
る。加えて、この信頼感が基盤となり実際に健康状  
態に変化が生じた際にすみやかに相談できる場所が  
あるという意識につながり、早期に健康面への対処  
も取りやすいと考えられた。

しかしながら、こうした効果を発揮するためには、  
死別後1か月までは遺族にとって忙しい時期である  
ことを考慮して、物品の引き取り、故人へのお参り、  
挨拶を交わすなど、短時間の訪問とすることが心身  
の負担への配慮として必要であると考えられる。

四十九日頃は、遺族にとって状況が【ひと段落】  
する時期であり、遺族訪問に訪れた訪問看護師と  
ゆっくり向き合って会話を行うことができていた。  
訪問看護師は遺族の精神的・身体的状態や日常生活  
状況について表情や話す内容、生活環境などから情  
報を得てアセスメントすることもできるため、継続  
的な関わり必要性を検討することができると考え  
られる。

そして、状況が落ち着き様々な変化が現れるこの  
時期に訪問看護師と落ち着いて会話をしたり感情の  
表出をしたりすることで、遺族は【癒やし】を感じ  
ていた。死別者は、死別からの立ち直りを試み、悲  
しみながらも、内省を伴う自己消化作業を繰り返し、  
生きる意義を問い返す悲嘆の作業(グリーフワーク)  
を行うが、ほとんどの人にとっては生涯に1～2度  
しか経験しない大きなライフイベントであり、心身  
の強い消耗を強いられることになり、他者の援助な  
どが助けとなることがある(宮林, 関本, 2008)。

訪問看護師が四十九日前後の状況が落ち着いた頃に遺族訪問を行うことは、遺族が亡くなった療養者のことや変化しつつある状況を語ったり感情を表出したりしながら自身で気持ちの整理をつけることを、側面から支援することにつながると考える。

この時期に遺族訪問を行う場合、遺族の思いや感情を十分に引き出すことができるように時間のゆとりをもって行くことと、生活状況に大きく変化が現れやすい方に訪問することが、効果的であると考えられた。

死別後に健康状態が不安定で、集中的な治療を要している場合など、状況が落ち着かない場合には、遺族は精神的にも遺族訪問を受け入れる余裕がないことも今回の結果から明らかとなった。高齢者が高齢者を介護するいわゆる「老老介護」のケースも多いことから（内閣府編，2015）、介護者も健康状態に不安や問題を抱えながら介護している状況が少なくないと考えられる。加えて療養者の介護を緊張状態の中で行い、看取るという精神的ショックや状況の変化から体調の悪化が容易に考えられる。したがって、こうしたリスクの高い遺族の場合には、身体的・精神的な負担を強くないためにもしくはは訪問という形ではなく、電話連絡や手紙など訪問以外の手段を用いながら経時的に状況を見守ることも必要である。そして、状況の経過を確認する中で落ち着いた時期を見計らい、改めて遺族訪問を行うことが心の整理を促すために効果的ではないかと考えられた。

今回、遺族訪問の実施時期について、訪問看護の記録に載っていない場合、遺族および担当した訪問看護師の記憶のみが頼りとなった。より厳密に時期を検討する場合、カルテへの記載がある対象者に絞るなどの必要がある。また、遺族訪問の具体的方法を検討するにあたり、今回は時期に焦点を当てたが、誰が行くか、どのくらいの時間をかけるかなど、その他の要素も遺族訪問の効果に影響すると考えられるので、今後の課題とする。

## VI. 結 論

今回の研究で、遺族が遺族訪問を受けた死別後1か月以内の早い時期の状況として【忙しさ】【健康状態の悪化】があり、四十九日頃では【ひと段落】【変化の兆し】があること、また、1か月以内の遺族訪問では【訪問看護師への信頼と感謝】【気がかりが解消された安堵感】を、四十九日頃では【癒やし】を感じていることが明らかとなった。

どの時期における遺族訪問でも遺族の肯定的な思いが引き出されており、心の整理を促すきっかけが存在することがわかった。したがって、これらの時期の状況特性を認識したうえで、それぞれの遺族の状況の個性も踏まえて訪問方法を選択することで、心の整理を促す役割を効果的に果たすことにつながると考えられる。

## 謝 辞

本研究にご協力を賜りました訪問看護師の皆さま、貴重なお話を聞かせていただきました対象者の皆さまに、深謝いたします。

なお、本研究は、平成21-24年度科学研究費補助金 若手研究 (B) (課題番号 21792350) による補助金を受けて実施した研究成果の一部であり、第17回日本在宅ケア学会学術集会において発表した内容に、加筆・修正を行ったものである。

## 文 献

- 平賀陸 (2008). 在宅ターミナルケアに関わる訪問看護師にとっての遺族訪問の実践とその意味. 日本地域看護学会誌, 10 (2), 26-32.
- 平賀陸 (2012). 訪問看護師から遺族訪問を受けた遺族の経験. 日本地域看護学会誌, 14 (2), 113-121.
- 工藤朋子, 古瀬みどり (2016). 訪問看護ステーションにおける遺族ケアに関する全国調査. 日本緩和医療学会誌, 11 (2), 128-136.
- 宮林幸江, 関本昭治 (2008). 愛する人を亡くした方へのケア 医療・福祉現場におけるグリーフケアの実践 (pp. 20-21). 日総研出版.
- みずほ情報総研株式会社 (2012). 平成23年度老人保健事業推進費等補助金老人保健健康増進等事業一人暮らし高齢者・高齢者世帯の生活課題とその支援方策に関する調査研究事業報告書.
- 内閣府編 (2015): 平成27年版 高齢社会白書. 35. 佐伯印刷.
- 島内節, 葉袋淳子, 中谷久恵, 富田真佐子, 山尾有紀, 山岸暁美, 村上満子, 内田陽子, 末田千恵, 相原洋子, 鈴木琴江, 栗盛須雅子 (2006). 在宅終末期ケア標準化のためのプログラム開発と実用化. 国際医療福祉大学平成18年度在宅地域ケア研究センター研究費による研究報告書.
- 東京都老人総合研究所, 東京大学, ミシガン大学 (2008). 高齢者の健康と生活 No. 3 「長寿社会における暮らし方の調査」2006年調査の結果報告. 東京都老人総合研究所.

# Effective methods of home visit by visiting nurses to encourage bereaved families to sort out their feelings following bereavement

— with a focus on implementation period —

Chika HIRAGA\*

## Abstract:

This study clarified the conditions and perceptions of bereaved families according to the period in which they received home visits by visiting nurses in order to examine specific visiting methods for bereaved families. Semi-structured interviews were conducted with members of bereaved families who had experienced home visits, and data obtained from 14 individuals were analyzed qualitatively and inductively.

The conditions of bereaved families were characterized by “busyness” and “worsening of health” when they received visits during the early period (i.e., less than one month after bereavement), and “settling down” and “a sign of change” around the 49th day. As for the perceptions, bereaved families felt “trust and appreciation toward visiting nurses” and “a sense of relief as worries disappeared” when they received visits less than one month after bereavement, and “healing” around the 49th day.

The conditions of bereaved families change as time passes after bereavement, and their perceptions toward nursing visits differ depending on differences in their conditions. Our findings suggest that it would be effective to choose an appropriate time for nursing visits for each bereaved family member to sort out their feelings following bereavement.

## Keywords:

visiting nurses, bereavement care, grief care

---

\* 1 Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

